

『激動する世界と日本文化』

主催 NPO 法人米欧亜回覧の会

グローバルジャパン研究会 第1回研究会

講師 服部英二先生

日時 2010年6月3日(木)18時～21時

国際文化会館セミナールーム

レポート

1. 宮川宗之(みやがわもとゆき) 筑波大学人文社会科学研究科文芸言語専攻
博士課程後期1年次
2. 山中冴ゆ子(やまなかさゆこ) 筑波大学人文社会科学研究科文芸言語専攻
博士課程前期1年次
3. 益子 優介(ましこ ゆうすけ) 筑波大学人文社会科学研究科文芸言語専攻
博士課程前期1年次
4. Baptiste PUYO 筑波大学人文社会科学研究科文芸言語専攻
博士課程前期1年次
- 5.. Anubhuti CHAUHAN 筑波大学人文社会科学研究科国際地域研究専攻
修士課程1年次
6. Dilusha Dehipitiya 筑波大学人文社会科学研究科国際地域研究専攻
修士課程1年次
- 7.. 田中佑(たなかゆう) 筑波大学人文社会科学研究科文芸言語専攻
博士課程前期1年次

服部英二先生講演会レポート

日時：2010年6月3日

場所：国際文化会館

題目：激動する世界と日本文化

筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻フランス語学領域
博士課程後期1年宮川宗之

2010年6月3日、国際文化会館セミナールームにて行われた服部英二先生のご講演会を拝聴する機会に恵まれた。NPO 法人米欧亜回覧の会主催のグローバルジャパン研究会の第一回研究会として行われたものである。タイトルは「激動する世界と日本文化」というものであった。地球環境問題や金融危機といった現代社会にとっての焦眉の課題は、一見個々の別々の問題であるかのように見えるが実際には「文明の危機」というひとつの大きな原因から生じるものではないか、という問題意識が主要なテーマとしてクローズアップされるものであった。またそしてそれに対し、一体どのような解決法が存在しうるのかということに関して新しい見地をもたらすものであった。

服部先生はまず、今日世界を席卷する数々の問題の根底には、異なるものの間の相互理解の不足が横たわっているとお考えになっている。例えば先生がかつてユネスコにおいて企画され実行されたシルクロード・対話の道総合調査が始められる以前、そのような調査は個々には存在したがそれらは決して相互的な性質のものではなく、現地の存在を無視した、いわゆる西欧文明側からの一方的な発見と資料の持ちかえりといった性格しか有しえなかったことを指摘されている。おりしも1991年には湾岸戦争が勃発する時期であり、その数年後1993年にはハンチントンにより「文明の対立」という図式が提示され人々の共通概念のうちに根を下ろすこととなった。世界をいくつかの文明によって色分けし、一言で言ってしまうとそれらの間の対立・無理解は避けがたいものであるとする意識である。しかしそのような情勢の中各地を巡った服部先生の企画されたユネスコシルクロード調査船の意図は、ただ一方的に押し付けるようにして調査するのではなく、むしろ各々の地にある良き文明をこちらから求めて旅をすることの中にあつたのである。

現代の世界を悩ませるさまざまな問題、それは時に宗教の名の下に繰り返される戦争であり、市場原理主義による資源の収奪であり、またそれに伴う格差と貧困の拡大であり、従来の統治システムの解体による世界規模の分裂と混乱であり、実に多岐に渡るわけだが、それらをして先生は「地球文明の限界」と喩えられる。それはすなわち、エーコの唱えるような飛矢のモデルにより象徴される成長と進化を至上命題とする従来の男性的原理による目的論的な西欧型文明の限界と言い直すことができるであろう。確か

に地球にはもとより限られた資源しかないのであり、それを考慮するならば物質的な意味で常に成長し続けることの不可能なことは論をまたない。講演中に先生のお引きになった GDP の世界的予想、来るべき数十年後の世界の GDP のうちの各国の占める割合が、19 世紀前半のそれを殆ど同じであるだろう、すなわち人口の比率の順に中国やインドが大きな割合を占めるであろうという指摘は、今日の状況は前世紀において西欧型文明がある意味無理をおして成長してきたということを示すものではないだろうか。それはつまり直接的に資源の枯渇を意味するのであり、また他の地域からの収奪をも意味する。今後従来の一極型の世界から多極的な世界へと移行していく過程で、なんらかの手を打たねば先生の仰る「限界」は必ずしや現実のものとなっていくであろう。

ところで先にあげた飛ぶ矢のモデル、限りない成長を前提とした直進的な時間の概念であるが、それがそもそも西欧独自のものであったかどうかについて先生は別稿にて疑問を呈しておられる。そしてそれは決してその文明に固有の本来的性格なのではなく、むしろ一神教の出現と関連付けられるものであると述べておられる。西アジアの過酷な自然、厳しい風土が彼岸への憧憬を生み、天国や楽園、約束の地という概念を生みだし、それがユダヤ教をして選民思想を生みだし、一方ではムハンマドによってイスラームへ流れ、また他方キリスト教により西欧文明の根幹をなすようになるのである。しかしながら、それでは現在のヨーロッパにおいてかつての非直線的な価値観が完全に失われたのであるかどうかについては、先生はそれを否定されている。各地に残る宗教的建築や文化の中にその潮流はなおまだ息づいているのであり、そこに全てを一元化し成長・進化へと鞭撻する男性原理とは逆の母性原理の復興する可能性をご覧になるのである。本セミナーでも仰っていたように、一神教とは他の神々の存在をあえて強力で否定せねばならないという意味において、実際には限りなく多神教的なのであり、また反対に日本に見られるような一見雑多な多神教的崇拝は、各々の神の上になんらかの上位的存在を見ているのではないかという意味で実は一神教的なのであると指摘される。一例ではあるが、そこにおいてもいわゆる「文明の衝突」的な考えでは決して実現しない「文明間の対話」というものが、十分に実現可能なものであり、また今後の世界の行く末を考える上の重要な問題意識のひとつとして、必ずなされねばならないものであるとすることができるであろう。

翻って私個人の研究テーマのひとつであるフランコフォニー（フランス語圏ないしはそれに関わる国際組織）、複数言語主義といった概念に引きつけて考えるならば、まさしくその問題意識は今後一層議論される必要のあるものだと考える。今しばらくさらに具体的に述べるのであれば、そのフランコフォニーの構成のうち大多数を占めるアフリカ諸国は、改めて言うまでもなく直接的には 19 世紀から前世紀に至るまで世界を席卷した西欧的な帝国主義・植民地主義の遺構であると言える。そしてそれはあえてハンチントンの理論にのっとって表現するのであれば、一部はイスラーム文明に属するものであり、一部はむしろ無文明といってよい地域に属するものであり、いずれにしても相互

理解のあたわなない地域に存在すると言える。すなわちそれはあくまで対話の存在しない、異なる文明間にある一種の虚構であり、その意味で西欧文明側からすれば理解というよりは隠然たる支配、対話というよりは単に経済的な繋がりにしかすぎぬと言われる可能性がある。事実初期のカルヴェなどはまさにそのような意味でこの組織を批判したのであり、またフランス本国では当時のド・ゴール政権はそのような評価を危惧して積極的に関わりを持たないようにしたと言われているわけだが、しかしそのような状況の中でむしろ積極的にこのフランコフォニーという国際組織の設立に尽力しまた深く関わろうとしたのは、従来の旧植民地＝旧宗主国という繋がりからは離れたカナダのケベック州であった。つまりその時点において単純な二項対立の垂直関係、いふなれば文明間の対立的な図式を超えてこの組織は産声を上げたのであり、言わば第三者的な関係、水平的・通底的な関係を当初より持っていた。そしてそれは現在に至るまで続いているのである。

服部先生がしばしばその重要なテーマのひとつとしてお取り上げになる楽園のイメージ、エデンの園であるが、そこには本来知恵の木他に生命の木が生えていたと言う。そして人は知恵を重んずるばかり生命の木の方は忘れていく、その忘却の歴史が現代まで至る文明の姿であると看破される。それに対して価値の一元化すなわち西欧的価値の普遍化からはとらえきれない母性的原理が今後確かに見直されてしかるべきであるが、それはとりもなおさず複元的な価値の再評価、循環的な時間のとらえかた、複数の信仰対象をそのまま受け入れるような懐の広さでもあるだろう。また先生は「普遍」に対して「通底」という概念を提唱されるが、それもすなわちさまざまな文明の底に共通して流れる相互理解の可能な価値を表すと考える。そしてその「文明間の対話」という相互理解の試みに対して、私達日本人は確かに先にあげたような第三者的な立場を積極的にとりうるのであり、また固有の文化力をもつがゆえの強みと同時に責務があると言うことができよう。私個人としてもその試みになんらかの寄与をしたいと思うのである。そしてそれはやはりまず歪みない目で他者を知ることから始まるであろう。服部先生はその意味において私達日本人のなし得ること、またはせねばならぬことに関してまずご自身にて先例をお作りになった。それに微力ながら続けたいと願う次第である。以上簡便ながらこの度の服部先生のご講演のレポートとしたい。

「激動する世界と日本文化」

1) 要約

1997年、イタリアの歴史作家ウンベルト・エーコは、過去2000年のシンボルを「矢」に例え、キリスト教的一神教に発した「時」は、一方向性を持って突き進み、そこから「進歩」という概念が生まれた、と述べている。それに対し、来るべき3000年紀のシンボルは「星座」、つまり多文化社会の尊重でなければならないと続けている。この発言はやがて「市場原理の見直し」へとつながり、2001年の「文化の多様性に関する世界宣言」の前触れでもあった。

筆者(服部)は、17世紀の科学革命は「進歩」の概念、「直進する時」、物質主義、植民地主義すなわち近代における「存在」から「所有」への価値の変換を語っている。「他文化蔑視」と「独占の原理」は「戦争の倫理」を生み、戦争の世紀(20世紀)を創り出したが、我々は今シルクロードの時代が持っていた「他文化の尊重」と「分かち合い」の心を取り戻すべきであるとも述べている。文化の深みには人間性の普遍的なもの、通底する価値が見出されるはずなのだから。

18世紀のヨーロッパで生まれた啓蒙主義は、「理性至上主義」且つ「男性原理主義」であり、人格形成に歪をもたらしたと同時に差別の原理ともなった。また、「文明」とは西欧啓蒙主義の生み出した資本主義制度のことに他ならないとし、自然と一体化した文明は文明とみなさず、「未開のものたちを<文明化>する」といった理由で、植民地主義を正当化した。

啓蒙主義進歩論者は、人間は自然を征服する権利があることや、自然は無尽蔵であるといった考えを持っていた。地球システムの破壊は、西欧に起こった聖俗の拮抗に始まると言っただけ。

1989年、ユネスコのバンクーバー宣言は、地球の生存は解決すべき問題であり、地上のあらゆる民族が共通の敵と一致して闘う必要があると明言する。その敵とは、環境のバランスを崩す行為や、未来世代に残すべき遺産を削減するといった行為を指す。さらに、1992年にリオデジャネイロで行われた地球サミットでは、維持可能な発展、つまり地球環境を維持できる限りでの開発の概念が生まれる。

進行中のグローバリゼーションとは、一つの価値、すなわちアメリカ的価値が他の全ての価値を圧していく姿である。

「自然界に種の多様性が必要なように、人間の生存にとって文化の多様性が不可欠である」とするユネスコによる世界宣言は、他者は自己の存在にとって不可欠の存在であり、諸々の異なる存在のおかげで自己の存在があり、「私」は生きるのではなく、生か

されているということを意味している。

文明が生きるには出会いが不可欠であり、もし世界が単一文明となり、出会うべき相手が無くなれば、それは文明の終焉の時であろう。

かつて西欧文明によって征服された少数民族の抱く価値も再評価され始めており、直進ではなく循環が、所有ではなく存在が、理性ではなく全人が問われ始めた。しかし、全てを数値化して説明しようとする姿勢を取るのであれば、それ自体が理性中心主義という西欧文明の枠を抜け出していないことを示す。今求められているものは、真の文明間の対話であり、それは「通底する」もの、すなわち全ての文化、特にかつての被征服民である少数民族の文化に敬意を払うもの、つまり感性と響き合う理性によってこそ為しうるもののことである。

2) コメント

グローバリゼーションとは本来、社会的あるいは経済的な連関が旧来の国家や地域などの境界を越えて、地球規模に拡大して様々な変化を引き起こす現象を指す。しかし、進行中のグローバリゼーションには、文化の同化、融合、欧米化、アメリカ化（アメリカニゼーション）といった現象がよく見られる。我々が目指すべきものは、動植物の「弱肉強食」の世界のようなものではなく、多種多様な文化が共生し、互いに刺激を与え合う世界ではないだろうか。筆者は、他者が自己の存在にとって不可欠の存在であると述べているが、まさにそのとおりだと思う。ごく当然のことであるが、我々は生みの親なしでは生まれることはできない。つまり、スタート地点から、我々は他者なしでは存在し得ないということである。

他者の存在の重要性は、言語の世界でも同じである。例えば、日本語には借用語が実に多く見られ、圧倒的に多いのが中国語(漢語)だが、その他、ポルトガル語の「タバコ」「ボタン」「コンペイトウ(金平糖)」、オランダ語の「コップ」「ビール」「レンズ」、英語の「パターン」「コンピュータ」「レンタル」、フランス語の「アンコール」「デッサン」「アンケート」、ドイツ語の「アルバイト」「カルテ」など、日本語に定着した語彙は多々ある。つまり、他の言語があつてこそその言語は成り立ち、「〇〇語独自」の言語は存在しないに等しいと言える。一見、母語とはかけ離れた言語であっても、学び始めると何らかの共通点が両言語の間に存在することに気づくことはあるだろう。この共通点も、他者の影響を全く受けないことはないということを示している。

この世で生きる限り、我々は他者の存在なしで生きていくことはできない。そのため、我々は互いの文化・文明を尊重し合い、そして一致団結し、共通の敵と闘う必要があるのではないか。

地球文明の限界とその展望

筑波大学人文社会科学研究所

文芸言語専攻フランス語学領域1年

益子 優

〈要約〉

2010年6月3日、NPO「米欧亜回覧の会」が主催するグローバルジャパン研究会が催された。講師は前回、日仏会館でお話して下さった服部英二先生で、演題は「激動する世界と日本文化」であった。以下が服部先生のご講演の概要である。

服部先生によると、現在、地球規模の環境破壊が進行し、文明の限界が露呈してきているという。それは具体的には、イスラエルがガザ地区に建設した壁に見られるような迫害や紛争といった姿の見える聖戦、イラクやアフガニスタンで起きているテロといった姿の见えない聖戦であり、市場原理主義によって行われる大規模な地球資源の収奪、それに伴う貧富の差の拡大、また中国などのアジアの新興勢力における精神性の欠如と政治と経済体制の矛盾をはらんだ経済発展などである。表面に現れたこのような問題の意味するところは、資本主義の行き過ぎがもたらしたグローバル化による民族国家の解消、物質文明を極限まで突き詰めてきたアメリカの支配の下での平和 Pax Americana の終焉、つまり近代文明の限界である。では近代文明とは一体、如何なるものであろうか。それは啓蒙主義の生み出した理性中心主義、科学主義とそれが可能にした物質的繁栄と資本主義制度のことである。そしてルネサンス以来、真理を問い続け、キリスト教と自然科学が激しく闘い続け、最終的にフランス革命によって自然科学がキリスト教に勝利することで達成された科学革命がその背景にある。しかし物質的繁栄の陰で、宗教と決別した価値を問わぬ科学によってモノの所有という価値の尺度しか持たなくなった人間の精神は砂漠化し、さらに理性的、西欧的な文明を普遍としたために、理性的でない女性、子ども、非西欧民族を差別、支配の対象としていった。

服部先生はこういった負の側面が抱え込んでいる「普遍」を標榜する近代文明に代わるものとして、「通底」という新しい概念を提唱している。「普遍」が世界を切り分ける男性原理に基づく理性中心主義によって全ての文明に当てはまる一つのものを目指すのに対して、「通底」は理性が感性と霊性と響き合い、理性崇拜によって失われた全人的な人間像の回復であり、それぞれの文明に共通するものを探り、互いに存在を認め合い、違いを尊重していくという考え方である。また、「全体は部分に包含され、部分は全体に行き渡る」という量子物理学者の言葉が華嚴經の一即多、多即一、一即一切、一切即一という思想、イスラムのタウヒードに見られる「神は万有に顕現」という存在論、ウパニシャッドの「梵我一如」の思想に通底するものだという。そしてこれから我々が目指すべき文明とは、ヘブライズムの系譜に連なる男性原理の力の文明ではなく、いのちの継承を究極の価値とする母性原理の生命の文明であり、世界における日本の役割は敗戦とともに失ってしまった美的感覚に恵まれた生活の仕方、簡素さやつつましき、

心のやすらかさであり、文化力なのである。

〈コメント〉

服部先生が近代文明の行き詰まりを解決するために提唱された「通底」という概念は、非常に抽象的であり、それは具体的な現実のレベルでは如何なる動き、活動になるのか疑問が残る。まず、「理性の否定ではなく、新しい理性主義を目指す」とは一体どのようなことなのか。近代科学が世界の物質的側面に対して理性を用いて働きかけを行った結果、現在の物質文明が出来上がったわけであるが、上の文は物質的な豊かさを今のまま享受しつつ、「感性、霊性と響き合う理性」、つまり精神的方面にも理性を働かせるということであろうか。もしそうだとするなら、ほとんど不可能な思想であるように思われる。なぜなら、人間において精神面と物質面を切り離すことはできないからである。また、諸事物や諸現象を連関させて認識する能力である理性を精神的な側面に高度に発展させたインドや中国も、日本と同様に西欧文明の前に自らの深遠な精神的礎を投げ捨ててしまったように思われる。従って失われた精神的側面に対する理性と霊性を取り戻すためにはおそらく物質文明との決別が必要条件であろう。またこのことは新しい理性主義の中で述べられた全人的人間像の回復という点にも当てはまる。高度に複雑化した近代社会において求められる人間像は、自分自身の生活とは部分的しか関係していないある役割を果たす単能者であり、そしてその仕事は時間と労働量と賃金と兼ね合いとしかみなすことができないものである。逆に前近代社会において、農夫、漁師、職人などは基本的には自らの生活に直接的に関係する仕事の全過程に携わっている。服部先生の述べる全人的人間像を伝統的社会形態の中での人間像とするならば、現代のような社会構造の上では不可能である。さらに、物質的な不充足によってのみ、人は霊性を持ち得るのではなからうか。霊性とは、自己という小我が宇宙意識または至高の存在である大我と一体であると感覚的に知ることだと思われるが、現代は、かつて物質的に飽和していた古代ローマの精神的暗黒時代にそっくりである。人々は自分たちを生かしている大いなるものの存在を忘れ、政治と軍事と土木工事に関心がないのだ。万物に生かされていると実感できない物質的に充足した状態では、人は霊性を取り戻すことはできない。また近代文明は自己中心的に考えられた自己、つまり自我の確立を肯定しているが、自他を差別して成立する個人的で狭い範囲の自己＝小我を肯定することは、生存本能に付随する自己本位な欲望を肯定することである。そしてその欲望の根底にあるものが、釈迦のいう無明、人は罪の子と言ったイエスの言う罪である。地球と人類を救うために、我々に必要なことは人間存在の根本に横たわる無明の自覚ではないだろうか。

近代文明の科学技術は自然を言語によって切り取り、分類することで生み出され、産業社会のイデオロギーもまた言語によって生み出されたものである。そしてその言語とは英語、フランス語などの西欧語である。従ってそれらの言語を分析することで近代文明の根幹にある問題が明らかになるのではないだろうか。そういったことを調べることも大変興味深い。

激動する世界と日本文化

Eiji Hattori

Conférence à la Maison Internationale du Japon

3 juin 2010

Baptiste PUYO (France)

文芸言語専攻言語学分野フランス語領域 1 年次

Changer ou mourir. Bouleverser les consciences pour ne pas égarer la nôtre. Tel a été le message alarmiste et sans concession que nous a délivré Eiji Hattori lors de sa conférence du 3 juin 2010 à la Maison Internationale du Japon.

Dans un monde constamment frappé par le constat de sa propre finitude et assailli quotidiennement par la menace d'une nouvelle crise, qu'elle soit économique, politique ou bien encore écologique, ce sont les contours mêmes de notre valeur en tant qu'être humain qui finissent par s'effriter. Mais le temps n'est plus au fatalisme. Trop longtemps simple spectatrice de sa propre chute et décadence, l'humanité, aujourd'hui acculée et dos au mur, ne devra son salut qu'à sa propre capacité à réagir et à bouleverser ses fondements profonds. Changer ou mourir, c'est tout ce dont il s'agit.

Jamais le monde n'a été aussi inégalitaire et au bord de la rupture qu'aujourd'hui, aime-t-on souvent à dire. Qu'il s'agisse des graves inégalités Nord-Sud ou de l'exploitation à outrance des ressources naturelles suite à l'essor de l'économie dite de marché, véritable «monstre économique», le monde est profondément en crise. Les guerres de religion sont là pour nous le rappeler : qu'elle soit politique, économique ou écologique, la crise est avant tout une crise de civilisation.

Nous vivons à une époque dramatique. La globalisation ultralibérale et la mondialisation des échanges ont fait voler en éclats tous les anciens repères culturels qui, sous toutes les latitudes et sous diverses formes, fondaient précisément nos civilisations. Depuis plus d'une vingtaine d'années s'est ainsi créé un «empire global», sous domination de l'Occident, dont on mesure encore plus précisément aujourd'hui les funestes conséquences sur les plans économique, social et financier. Il serait néanmoins très réducteur de s'arrêter à cet aspect purement économiste du phénomène. Car, bien au-delà de la mondialisation des échanges et de «l'économie de marché», qui est la cause directe d'une multitude d'inégalités économiques, sociales et écologiques, c'est

bien plus une «société de marché» au sens d'imprégnation idéologique que nous voyons se constituer.

Nous sommes ainsi passés d'une société de l'Être à une société de l'Avoir. Produit de la Philosophie des Lumières, le pouvoir de la Raison a plongé nos sociétés modernes dans une logique de rationalisation à outrance, qui exclut tout sentimentalisme et toute spiritualité. Eiji Hattori parle d'une logique «masculine», qui empêche tout contact émotionnel ou spirituel avec le monde qui nous entoure. La Civilisation ne peut être alors perçue que comme unique et universelle.

C'est précisément cette «idéologie de marché» et ce principe de «civilisation unique» qui a anéanti tout ce qui constituait non seulement la culture au sens large mais le «vivre ensemble» des sociétés et des civilisations.

Cette conception à la fois unilatérale et universalisante du monde ayant aujourd'hui abouti à l'impasse structurelle que nous connaissons, il s'agit donc de repenser le principe même de civilisation en remplaçant l'humain et l'individu au coeur même de nos sociétés. Il convient d'abandonner le principe d'universalité pour adopter celui de particularisme. Le monde est pluriel, et c'est justement de ses différences que lui vient sa richesse. Il ne s'agit pas de renier en bloc le principe de raison et de détruire tous nos schémas de pensée mais de réintroduire dans notre conception du monde un semblant d'humilité et de compassion. Eiji Hattori parle d'une «logique féminine», qui redonnerait à l'humain sa part d'âme et d'humanité.

Eiji Hattori appelle de toutes ses forces à ce bouleversement des mentalités et exhorte le Japon, tiraillé entre sa culture asiatique et son économie mondialiste, à jouer un rôle prépondérant dans cette entreprise de reconquête.

«Nous autres, civilisations, savons maintenant que nous sommes mortelles», disait Paul Valéry. Plus que jamais les mots du poète français auront flotté à la Maison Internationale du Japon en ce jour du 3 juin 2010.

激動する世界と日本文化

A talk by Mr. Eiji Hattori

Anubhuti CHAUHAN (India)

筑波大学人文社会科学研究科国際地域研究専攻 1 年次

The *Global Japan Kenkyukai* (Global Japan Society) organized a talk by the Mr. Eiji Hattori on 3rd June, 2010 to which IFERI students were also invited. Below is a brief outline of his talk, followed by my personal impression on the subject.

UNESCO's The Silk Road project

The Silk Road was not just a trade route but a channel that allowed various thoughts to flow across vast continents. It linked people like never before; creating opportunities for dialogue. Yet we find the attitude of communicating with local communities and learning from them missing in the present times.

The project attempted to address this very issue by sending an expedition – through land and sea. It is rather symbolic that it happened to be conducted right at the time when the Gulf War broke out.

The UN's support of the Gulf War was seen as the first civilization war. Samuel P. Huntington's “The Clash of Civilizations” together with media's broadcasting of the war formed the view that civilizations were bound to clash. At times like this a project like the Silk Road had special significance.

The crisis facing our civilization

The world today faces two major problems – destruction of the global environment and what can be termed as a “crisis of our civilization”. Though these two may seem distinct problems at first they actually originate from the same source. Below is an overview of this crisis.

A major problem faced by the world is terrorism. This problem is of two kinds – visible terrorism and invisible terrorism. The former is of the nature represented by Osama bin Laden and the later is being carried out by the US. However both these kinds are similar in the sense that they both justify their conduct under the pretext of carrying out a “holy/righteous war”.

The other alarming problem is the growing poverty and ever widening gap between the haves and the have not's due to forces promoting market fundamentalism.

Besides this, we are also faced with a lack of leadership. With the end of Pax

Americana, increasing polarization of the world (i.e. division into the western and Islamic world, emergence of powers like China, India and EU, revival of Russia), declining role of the G8 and uncertainty regarding the potential role of G20, disappearing nation states and the ever increasing presence of multinational businesses driven by market fundamentalism, it is hard to tell where the mantle of global leadership will fall.

With problems of such global magnitude it is no surprise that allusions are often made to global destruction and an end to human history. One example is the 2012 phenomenon which comprises a range of eschatological beliefs that cataclysmic or transformative events will occur on December 21, 2012, which is said to be the end-date of a 5,125-year-long cycle in the Mayan Long Count calendar. However, instead of interpreting it as a catastrophe, we could perhaps think of it as a “reset”. What has to be “reset” is the unchecked market fundamentalism that has put great strain on our environment, plunging the world into a global crisis it has never seen before.

What is required to bring about such a “reset” is to nurture diversity. A study shows that the ecosystem at the earth’s poles lacks biological diversity, making it fragile and easier to disrupt. Applying the same concept to mankind, we can say that cultural diversity makes for a healthier environment. UNESCO's Universal Declaration on Cultural Diversity reflects this very belief. Diversity is in fact the greatest asset the world possesses.

The modern concept of “civilization”

The concept of civilization has been misinterpreted. The scientific revolution in the 17th century sparked the changes that have come to define the modern world. Though there have been many revolutions in various parts of the world, it was Europe that gave birth to this one. The reason lies in the strife between the beliefs of the church (religion) and the findings of natural science after the dawn of Renaissance. From then on science came to represent thoughts that were value free.

Modern civilization is characterized by principles promulgated by enlightenment and science. This has led to an over-emphasis on rationalism, male dominance and objectification of nature. The “value free” approach of science has led to creation of weapons of mass destruction. Man, along with natural resources, is viewed as a tool to be used and exploited. Quantity rather than quality is being emphasized. Ever since the industrial revolution, mankind’s pursuit of material gains has plunged civilization into a quest of power. All this has led to what can only be called as a “desertification of ethos”. In other words, people’s concerns have moved away from “etre” (to be) towards

“avoir” (to have)

Enlightenment and its unique breed of rationalism also gave birth to the ideal of “universalism” which was interpreted to mean “moving towards the one”. Ideals that were considered “universal” were looked up to, whereas those that were peripheral were cast aside. This caused the predominance of one value – of rationalism that was male centric – and lead to discrimination of women, children and non-European communities.

Moving towards compassion and transversal values

Transversal values are not in contradiction to rationality. The difference from universalism is that universalism advocates harmony due to absence of difference, whereas transversalism advocates harmony with diversity. It is a more holistic approach which recognizes multiple cultures and respects their innate differences. The other value is that of interconnectedness and mutual dependence.

The life style of the fertile crescent of Eastern Asia is an example that reflects these values. Here, the cycle of life can be seen in the water cycle that links mountains, forests, rivers and oceans. The culture here takes us back to a time when motherhood was valued as life itself.

For a holistic image of mankind, we need to strike a balance between rationality, spirituality and sensibility- a balance that was destroyed by the scientific revolution.

Role of Japan in the global context

Japan was first introduced to the western world after the collapse of the Edo Bakufu. The consequent forced opening of the country to foreign powers and their show of military display made European civilization seem the true model of what it means to be civilized and Japan chose to follow along the same path. However, what is expected of Japan is the same as that from other nations, which is to create a civilization not based on power but a civilization of life.

Albert Einstein, on his visit to Japan in 1922, commented that Japan should preserve its traditional values instead of adopting western ones. The values he alluded to were 1) a life style which is rooted in a unique aesthetic sense, 2) simplicity of essential objects, and 3) serenity of heart. The real contributions Japan can make to the world are not in the field of economics, but in the field of culture - by searching for god not in confined spaces but in open nature, by emphasizing motherhood, and by promoting dialogue.

Personal remarks

The words that kept coming back to me as I heard Mr. Hattori's talk were the Sanskrit words "*Vasudhaiva Kutumbakam*" which means the world is one family – interconnected and diverse. This phrase can be traced back to the Upanishads and has been the bases of much of Indian thought. Even today the word "kutumbh" is used to denote family or community. But it is unique in the sense that it does not just include members of the group, but also the environment or space occupied by the group. Coming from this background, it was easy to see the point of connectedness and transversalism made by Mr. Hattori.

Insightful as the talk was the following are some questions that I was left with after listening to professor Hattori.

The talk, due to the nature of the topic, covered many issues and analyzed it over the period of human history. What clearly came out of it was the message of compassion and the need for dialogue between communities as means to resolve conflict and deepen understanding. In an interacting, multicultural world the attitude of dialogue has special significance. However, how do we go about nurturing this attitude and what are the concrete steps that need to be taken are both questions I still cannot find an answer to

During the talk, Professor Hattori mentioned the two trees of knowledge and Life in the Garden of Eden. He demonstrated that the history of human civilization has hereto concentrated on the former, largely ignoring the later. In eating the apple, man became god-like; possessing the ability to control and mould nature as he saw fit. This, he feels, has had its repercussions which can be seen from global problems like environmental degradation. However, in his opinion the true history of civilization is the history of the tree of life.

The allusion to the "Tree of Life" and the "Tree of Knowledge" was a powerful allegory that gave a clear understanding of the framework of the talk. It was relatively easy to grasp what he meant by the "Tree of Knowledge" because of the historical context he provided. The meaning of the "Tree of Life", on the other hand, was abstract and something I would need to delve deeper into in order to fully comprehend.

「激動する世界と日本文化」について

ディルーシャ・デギピティヤ(スリランカ)

国際地域研究専攻1年次

本レポートは、米欧亜回覧の会主催グローバルジャパンセミナー(2010年6月3日(木)、於国際文化会館)における服部英二氏(麗澤大学比較文明文化研究センター客員教授)の講演「激動する世界と日本文化」についてである。その講演を聞き、自分にとって興味深かった点を以下に述べたい。

最初に、服部先生のお話は、ユネスコが組織した「シルクロード総合調査」の説明から始まり、シルクロードとは、思想を運んだ道であり、砂漠の道・草原の道・海の道を問わず、なによりも、「文明間の対話の道であった」と指摘された。服部先生によれば、文明が生きるには出会いが不可欠である。だからこそ、シルクロードとはすぐれて文明の対話の道という表現がふさわしい。文明は「出会いによって子を孕む」のである。もし世界が単一文明となり、出会うべき相手が無くなった時が到来すれば、それは文明の終焉のときであろう。

また、服部先生は宗教に関して、仏教の現状は不安に思われることを述べられた。例として、中国では仏教が消滅していること、また、本来の仏教から変化したチベットの仏教などが取り上げられた。そして、日本には中国大陸から仏教が伝わったが、日本の仏教は日本的仏教であることも、講演で指摘されたところである。しかし、服部先生は、現在、精神文化はどこへ行ったのかという疑問を投げかけられた。

次に、地球環境破壊と文明の危機については、今、地球環境問題が金融危機と共に焦眉の課題となっているが、これらは個々別々の問題なのではないと指摘された。われわれが直面しているのは「文明の危機」なのである。かつ、中近東に見る出口なき戦争、市場原理主義による地球資源の収奪、格差と貧困の拡大、指導者なき世界をわれわれは目にしている。地球を破壊しつつある西欧的・男性原理的「力の文明」に代わる、全人的・母性原理的な「いのちの文明」一諸文明に通底する価値一を日本から発言する重要性を訴えている。さらに、差別の対象として、女性・子供・非西欧民族を挙げられた。特に、ヨーロッパの女性に比べ、日本の女性の地位が決して低いわけではないことも指摘された。さらにこの原因になり得るため、「uni」に代わる「trans(超える) versal」という新しい思想に基づいた理性の見直しの必要性についても述べられた。これを服部先生は「新理性主義」と名付けられ、「感性と霊性とが響き合う理性」により、「真理へのホーリスティック holistic なアプローチ」を行うことの重要性を強調された。

地球環境破壊と文明の危機という問題は「多様性の否定、単一化」という同根の原因を持っている。これに対して、ユネスコは「多様性こそが人類の世界遺産」であり、エコシステムを強くするという哲学に基づいた世界宣言(2001年)を行った。服部先生はその経緯について説明された。地球と人類を救うため日本の貢献は、経済力ではなく「文

化力」であると指摘された。さらに精神の砂漠化を食い止め、新しい感動を呼び起こす「人間力」である。人々は地球を破壊するが、貨幣価値は精神価値と等価になるはずがないのであると述べたことも興味深いところである。

そして、メディアについての話も取り上げられたが、残念ながら私にはその関連性がよく理解できなかった。しかし、服部先生によると、「メディアとは本来「媒体」の意味だが、巨大化したメディアは、それが巧みに使われるときは、もはや真実を伝えるのではなく、真実を造り出すのである。従ってわれわれは氾濫する情報の彼方に事実を見抜く目を養わねばならない」とのことである。

講演を聞いて、理解できなかったところも幾つかある。例えば、出口の見えない「宗教」の名の下の戦争での姿を見せない聖戦、姿を見せる聖戦のところ、また、エデンの園の忘れられた樹のところは十分に理解することが難しかった。しかし、全体的に幅広い範囲の話聞くことができ、さらに、様々なことについても学ぶことができ、有益であったと思う。

私はこのような文明に対するお考えを初めて聞き、非常に興味深く思った。まず、服部 (cf. 2003 年) によれば、セイロン (スリランカ) のアバヤギリ僧院からは多くのセイロン僧が海のシルクロードを利用し、中国に渡っている。このように、古代からスリランカでは、仏教が盛んになっていたということである。そして、個人的な意見だが、人間としての経済発展に限らず、精神的な発展も不可欠であると思われる。その際、宗教は大事な役割を果たしているに違いない。従って、現代のスリランカの仏教について言えば、変わりつつ残っている状態である。しかし、残念ながら、経済発展の面から見れば、スリランカはまだ遅れている。それで、私は現代のスリランカは仏教を含めた宗教、文化を大事にし過ぎているため、経済発展が遅れているのではないかと、服部先生に尋ねたが、服部先生は、それは理由になるわけではないということだった。私は宗教を大事にされるその話に関心を持った。

次に、男女平等の社会については、まだ完全な男女平等社会ではなく、それは社会向上への大切な要素であると考えられる。現在のスリランカの社会も男女平等社会だと言われているが、実は、男性原理的社会である。しかし、経済発展を考えていく上で、男女平等のことも念頭におく必要があるのではないかと思われる。そして、ある国の国民であっても、世界の人間として、平等さを大事にし、「共に生きる」精神で考えて、行動を起こすことが大事ではないか。

また、現世界の人々は、精神的な面を忘れ、お金、または、経済成長が何よりも大事だとされていると思われる。しかし、それは全てではないという、理解を深めることは非常に重要なことである。かつ、理解させる、考えさせるための工夫も不可欠である。それは政治家たるものの役割であると考えられる。

特に、グローバルゼーション、すなわち、市場原理というアメリカ的価値が他のすべての価値を押ししていく姿をある程度コントロールするための努力も必要ではないかと

思われる。その面で日本も大事な役割を担っているのではないか。また、それは、国を問わず、人類共通の役割であると思われる。そして、インドはその面で進んでいる国だと思う。反面、スリランカでは、まだ植民地時代のメンタリティーが残っていると感じられる。つまり、いつも他の国を依存している考え方を持っていることである。最後に、メディアの話に関しても、全く同感である。スリランカでもメディアは大きな話題となっており、問題を作り出す、あるいは、拡大する手段となっている。かつ、信頼できない状態である。例えば、ただ、利益を得ることを目的とし、偏った意見を持ち、実態とは全く違う形で、政府かつ政治家を評価することばかりしている状態である。

服部英二先生「激動する世界と日本文化」を聴いて

人文社会科学研究科文芸・言語専攻 応用言語学領域 1 年次

田中佑

1. 講演のまとめ

2010年6月3日、国際文化会館で行われた御講演「激動する世界と日本文化」において服部英二先生がなされたい主張は次の二点である。第一に、現在地球規模で問題となっている環境問題と金融問題は「文明の危機」という同根の問題という点である。そして、それを解決する方法は文明の多様性を認め、その違いを尊重することにあるという。二点目は、日本文化が持つ価値観は世界がかつて有し、失ったものであるという点である。そして、服部先生は日本ができる地球規模の貢献はその文化力を世界に発信していくことであるとされている。

先に挙げた「文明の危機」に関して、服部先生は、産業革命以後の西欧にその歴史的な原因を見ている。産業革命以後、人々の関心は「存在」から「所有」へと移り変わった。この意識の変化は単数としての文明(the civilization)と「普遍」という概念を生み出し、文明間の上下関係と差別を招いた。そして、これらが植民地主義を正当化し、世界は Universal を目指す方向へと向かうのである。しかし、服部先生によれば、Universal を目指す地球文明は限界を迎えているという。それは現代の社会が端的に表している。グローバル化による民族国家の解消や市場原理による多国籍企業の世界支配による世界の一元化はヒトをモノ化し、境界ない自然に線を引き、それを奪い合い、かけがいのない地球を破壊している。その先にあるのは終焉のみである。服部先生は、破滅へと向かう近代文明が立ち直るための一つの道として「Universal」に対する「Transversal」、日本語に直せば、「普遍」に対する「通底」があるとされている。通底とは、全ての文明に尊厳を与える相互依存の原理に寄って、森羅万象は相互に繋がっているという認識をする生命の文明論である。普遍的文明が一つの個が他の全てを征服するのに対し、通底的文明では全は個に包含され、個は全に行き渡るのだという。この「通底」という概念は母性原理に基づき、理性・感性・霊性のバランスを尊重する。それはかつて世界各地に遍在した Anima への指向なのだという。以上から服部先生は、通底の概念に立った時にこそ人類は科学革命で失った全人的人間像を取り戻すということを主張するのである。

第二に、服部先生は「通底」という概念に立つべき現代において、日本人はすでに世界に発信すべきものを持っていることを主張する。そして、それはかつてアインシュタインやアーノルド・トインビーが日本文化に触れて発したことばに集約されているという。

私の願いは、日本人が、西欧の先を行く、自らの偉大な価値観をそのまま保持し続けてほしいということだ。その価値観とは、

- ①美的感覚に恵まれた生活の仕方
- ②必要とするものの簡素さとおつましき
- ③心のやすらかさ、である。

アインシュタイン

この聖なる地に立つとき、私は、すべての宗教の底に横たわる一なるものを感じる

アーノルド・トインビー

トインビーが言う「底に横たわる一なるもの」こそ「通底」そのものなのである。万物に神を見る日本の自然観こそが、今世界に必要とされているのである。このような「文化力」の再認識と発信が、日本が地球を、人類を救うためにできる貢献なのだというのが、服部先生の本講座第二の主張である。

2. 講演を聴いて

現代社会が直面している環境問題と金融危機は、今後日本を、そして世界を担っていく私達世代が考え、解決していかななくてはならない最も大きな課題である。服部先生はこの二つの問題を人間精神の在り方という一点に集約して次世代に問題克服の道標を示して下さっている。

講演を聴いた私達が今後しなくてはならないことは、服部先生の主張を理解し、実行することである。本講演における服部先生の第一の主張は、文化の多様性を認め、異文化を尊重することの必要性である。そのためには先ず、異文化を知る努力をしなくてはならない。相手が必ずしも私達日本の文化に始めから共感を抱いてくれるとは限らない。従って、先ず私達が異文化を理解し、受け入れる姿勢を持って相手と接しなければならぬだろう。そのような意識を常に持ち、自国と異なる文化を有する国や地域を訪れ、異文化に接し、理解すること、そして自国の文化を伝えることを積極的に行っていかななくてはならない。

他国の文化を理解し、尊重していく一方で、私達は自国の素晴らしい文化を再認識しなくてはならない。それが服部先生の本講演における第二の主張である。服部先生の御講演を聴いて、私は先ず、本当に日本が世界に発信できるような自然観を持っていたのだろうか、と思った。少なくとも今までの人生の中でそのようなものは見たことがないのではないかと思っていた。しかし、講演を聴いて少し時間をおいた今は、改めて自分の今までの人生を見つめてみて、その時の感覚が間違っていたと感じている。故郷の自然の循環を用いたお茶の栽培方法やアインシュタインが感銘を受けた日本家屋や日本の芸術を私は何度となく目にしているはずなのである。要するに私は見ることを怠っていたのだ。日本文化に宿る日本古来の自然観を再認識するためには、それを意識して見る必要がある。それを意識し、日本に現存する通底を具現化している歴史的遺産を実際に見、感じる事が、服部先生の言う日本の「文化力」の発信、さらには、私達

日本人ができる世界への貢献の第一歩となるのではないだろうか。

3. 研究と照らし合わせて

上で記した二点を実現するためには、私達自身のライフワークにそれらを組み込むことが近道だと考えられる。私達大学院生のライフワークは研究である。そこで以下では、「異文化の理解と尊重」と「日本文化の再認識」の二点と自分の研究との接点について考えてみたい。

私は現代日本語文法の記述的研究を行っている。また、それと並行して日本語教育も行っていきたいと考えている。先ず、研究については「日本文化の再認識」との関係が考えられる。

私の研究は一つの言語形式に着目する、いわゆる記述的な研究と呼ばれるもので対象としている言語形式は「数詞＋名詞」、例えば「三社長」「三試合」「三回転」などである。従来の研究では、日本語の数量表現において名詞と数詞が直接結合することはなく、必ず助数詞（「三匹の子豚」の「匹」のような語）と呼ばれる語を伴わなくてはならないとされている。それに対し、英語などの欧米語にはそのような制約がなく、いわゆる可算名詞と呼ばれるものは、単複の一致は必要なものの自由に数詞と結合することができる（例えば、“two brothers”）。しかし、これは欧米語に助数詞がないことを意味してはいない。欧米語でも、可算名詞に対する不可算名詞のうちの物質名詞（例えば、“water”）を数える場合には“a glass of water”のように助数詞を必要とする。このような日本語の数量表現と欧米語の物質名詞における数量表現の類似から日本語は助数詞がなければ名詞を数えられる状態にできない言語であるとされてきた。これは日本語母語話者と欧米言語話者の「数える」という認知行動が異なっているということの意味するのである。しかし、このような分析は欧米語の観察を基にした日本語の観察からの帰結である。様々な検討は必要であるが、日本語における先に挙げた「数詞＋名詞」という形式の存在は従来の研究からの帰結を批判する証拠となる。そして、これは数量表現を生み出す認知行動に関して、日本語母語話者と欧米言語話者に差はなく、表面上の言語形式は異なれど、その根底にある認知的なレベルでは同じシステムを共有していることを示す証拠にもなると思われる。つまり、言語下に「通底」する人間の特性の指摘である。言語はその文化圏のアイデンティティの象徴と位置付けられる。従って、今までの言語研究で目を向けられなかった日本語の現象に改めて着目し、日本人の眼で日本語を正確に記述していくこともある種の「日本文化の再認識」になると考えられる。現在の言語研究は人間言語に共通する普遍文法の解明を目指している。しかし、実際は英語の分析から生まれた理論を様々な言語で検証しているものが多く、極端に言えば、「Universal」に向かっていると考えられるように思う。言語研究において「Transversal」を目指すということはそれぞれの言語をそれぞれの母語話者がそれぞれの眼で見るといふ、いわば各文化を再認識することではないだろうか。今後、私の研究が英語の理論を「Universal」に

するための研究ではなく、日本語を再認識し「Transversal」な文法を目指すための研究になるよう意識し、努力していきたいと思う。

上では、自身の研究と「日本文化の再認識」との接点を探ってみたが、以下では「異文化の理解と尊重」との関わりについて考えてみたい。私は上記の研究と並行して、日本語教育に携わっていきたくて考えている。そして、そこに「異文化の理解と尊重」と私の接点が見いだせるのではないかと思う。

日本語教育の現場は、まさに異文化の接点である。そこには少なくとも二つの文化圏の人間が存在し、母語とは異なる言語を習得しようとしており、私は彼らに日本語を教えるのである。しかし、もしそこで私が単に日本語を教えるだけならば、それは非常に勿体ない事である。日本語教育の場は異文化を理解する絶好の場である。彼らがどのような日本語を難しいと感じるのか、どのような表現をよく間違えるのかなどから彼らの母語と日本語の相違点、さらにはその根底にある文化的な要因も、見ようと努力すれば、見ることができると思う。このように他言語を理解し、尊重することができる接点として日本語教育を捉えることができれば、自ずと「Transversal」への意識が生まれてくるのではないだろうか。また、彼らが日本語を勉強しているならば、きっとその多くは日本文化に興味を持っているはずである。現在、日本の文化といえば、先ずマンガやアニメが上がってくるだろう。これは年少学習者に日本への興味を持ってもらう第一歩としては最適の日本文化であるが、就学生や大学生、社会人を対象とした日本語教育においては必ずしも最適とは言えないように思う。多様な文化の一つとして日本古来の文化や自然館を教材にした日本語教育ができれば、文化力の発信にも繋がるのではないだろうか。

以上の二つが、服部先生の御講演を聴いて私が考えたことである。私は今まで、言語研究や日本語教育以外にはあまり目を向けて来なかった。しかし、今回の服部先生の御講演を聴いて広い視野を持つことの大切さ、自国の文化を見つめなおす重要性、そして何より自分が社会に貢献できる可能性を考えさせられた。今後、自分の研究が社会にどのように貢献できるのかを常に考えながら、IFERIプログラムを十分に活用して、隣接領域や一見関連しないような分野も視野に入れて、研究を進めていきたいと思う。